

ミヤコタナゴの稚魚が育っています

水産試験場ではミヤコタナゴを保全していくための調査・研究を行っていますが、並行して各生息地の系統保存(飼育・繁殖)を行っています。生息地での不測の事態に備えるためです。現在では、水産試験場で昔から飼育している水試系、矢板生息地由来の矢板系、羽田生息地由来の羽田系、A生息地由来のA系の4系統を飼育しています。

水産試験場では、毎年6月から7月頃にかけて保存集団の繁殖を行っています。ミヤコタナゴをはじめとするタナゴの仲間は、マツカサガイやドブガイなどの二枚貝に産卵する習性を持っています。このため、繁殖の時期になると水槽に二枚貝を投入し、産卵できる環境を整えます。

産卵の準備ができているミヤコタナゴの水槽に二枚貝を入れると、すぐに寄ってきます。少し時間がたつと、オスは貝のまわりに“縄張り”を作って、他のオスを追い払うようになりますが、時には近づいてきたメスまで追い払ってしまうこともあります。

産卵から1ヶ月ほどたつと、ミヤコタナゴの稚魚が二枚貝の中から出てきます。生まれてすぐのミヤコタナゴの稚魚の大きさは1センチぐらいで、見た目も親に似ていません。3ヶ月ぐらいたつと親と変わらない姿になり、次の年には繁殖できるようになります。

今年も水産試験場では、たくさんのミヤコタナゴの稚魚が生まれ、現在もすくすくと成長しています。近い将来、親たちの住んでいた生息地を泳ぐ日が来るかもしれません。

